夢の彼方の魔法陣

元素猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の彼方の魔法陣

【Ｎコード】
Ｎ９５９９Ｘ

【作者名】
元素猫

【あらすじ】
魔導士養成所の三年生イーリーは、卒業試験に『ドラゴン狩りの手伝い』を依頼されてしまう。途方にくれた彼は、とりあえずレポートを書くために最強の闇の魔導師アイソリュースが残した蔵書を見せてもらえることになり・・・。

プロローグ

名前を呼ばれ振り向いた瞬間、彼の幅広剣が深く突き刺さった。彼女は、何が起きたのかわからず、彼の顔を見つめる。穏やかで優しいその顔には、微塵の迷いもない。

噂は本当だったのだと、その時彼女は気付いた。到底、相容れることなど出来ない存在だったのだとわかっていたが、終わりはあまりに突然で、あっけない。

自分は何だったのだろうか。何のために、戦ったのだろうか。

すべてが、無意味に思えた。

涙が溢れたが、それが彼の心を動かすことはない。彼には野望がある。その野望を成就させるためなら、何であっても払いのけるだろう。そう、自分も払いのけられたのだと、彼女は思った。

「人心を惑わす不逞(ふてい)の輩よ。この地に眠るがいい」

「あなたは私の屍骸の上に、何を築くというの」

「法を築く。それが、この国の礎となる」

「血塗られた法に、人の心は縛られない」

「光が強く輝けば、闇はそれに打ち消され薄くなる。やがて、時がすべてを忘れさせるだろう」

彼は、突き刺した剣を真上に斬り上げた。彼女の肉体は、無残に裂かれ、闇の空を血に染めた。

「魔女は死んだ！　我らは勝利したのだ！」

勝ちどきの声をあげる。

彼は彼女の屍を一瞥し、歩き出した。彼にはまだ、最後の仕事が残っているのだ。

プロローグ（後書き）

１０年ほど前に、自分が初めてちゃんと書いたファンタジーです。すでに完結した作品なので、多少の見直しをしつつ更新したいと思います。

第一章　一話

すべての光が失われたような暗闇の中で、イーリー・シュレイガーはひとり思考を巡らせていた。理論は完璧である。手順さえ間違えなければ、失敗することはない。そう自分に言い聞かせて、彼は時が来るのを待った。

ほんのわずかな時間なのだろうが、彼にはとても長く感じられた。まるで死に直面したかのように、これまでの人生が走馬灯のように蘇る。

病に倒れ、道端で手の施しようもなく息を引き取った母の姿が、深い悲しみとともに無力な自分の心を締め付けた。あの時、強い人間になろうと誓ったのだ。

この難関を突破しなければ、あの時の誓いも、これまでの努力も無駄になってしまう。

イーリーは、頭を振って弱気な自分を追い払った。

……胸を張りなさい。

恥じるようにうつむく彼に、母がよく言い聞かせた言葉だった。

イーリーは胸を張った。戦うべき相手は、いつも自分の内にあるのだ。

緊張のためだろうか。気が付くと、わずかに魔導書を持った右手が汗ばんでいた。イーリーは魔導書を左手に持ち替えると、着ていたローブで汗を拭い、冷えた空気を鼻から吸い込んだ。そしてゆっくりと口から吐き出し、それを数回繰り返して、気持ちを落ち着かせた。

やがて一つの、炎のような明かりが灯る。明かりはイーリーを中心とした正方形を描くように、ぜんぶで四つ灯って暗闇を照らした。ぼんやりとした光の中に浮かび上がった彼の姿は、十四、五歳の、まだあどけなさを残す少年であった。

黒髪は闇に溶け、わずかに茶色味を帯びた瞳には、橙色の明かり

が揺れている。
ハイデル王国が魔導士協会と協力して設立した、養成所の三年生生徒というのが彼の立場であった。
ハイデル王国は、建国の英雄である初代国王ゼーマン・ハイデルが、勇敢な騎士であると同時に、強力な魔導士であったところから、騎士だけではなく魔導士の育成にも力を注いでいた。
この養成所を卒業した者だけが魔導士を名乗れるため、世界中から多くの若者が入学して来ているのだ。イーリーも、その一人だった。
「それではこれより、魔法課程の修了試験を開始する。生徒イーリー・シュレイガー君、始めなさい」
「はい」
直接、頭の中に語りかけるような声に応え、イーリーは魔導書を右手の掌に乗せ、挟むように左手を添えた。
この試験では、課題となる四元素――地、水、火、風――の魔法のうちから、最も得意なものをひとつ披露しなければならない。その際、補助として魔力を増幅する道具をひとつだけ持ち込むことが許されていたのだ。多くの呪文で紙面を埋めた魔導書は、それ自体が魔力をわずかながら帯びていた。
「定義（ヴァース）！」
イーリーの声に呼応して、魔導書に添えた左手が燐光のような光を放った。
魔法の基本は、代価による契約である。
元素界の住人と契約し、魔力を報酬として払う代わりに、その力を借りるという契約の流れを儀式化したのが魔法なのだ。多くの魔力を消費するほど、強力な住人の力を借りられるのであった。
儀式はまず、住人がこの世界で力を揮（ふる）えるようにするため、仮の体を用意しなければならない。この仮の体を『素態（そたい）』と呼び、魔力を練成して造る。練成した魔力は、そのままではすぐに散ってしまうので、一度媒介に留め置くことが必要だった。イーリーの場合は、

光る左手が媒介になっていた。
媒介に自分の体の一部を使うのはごく一般的であり、初歩的なものであった。素態を別の物質に伝達させる必要がなく、力を利用する時の感覚が掴みやすいのである。
魔法の扱いは、体系化された理論と経験による感覚が必要なのだった。
「召喚（クリート）！」
媒介の左手が熱を帯びたように赤くなり、蛍の光のような速さで明滅を繰り返し始めた。元素界との間に道が開かれ、用意した素態に見合う住人が移動を始めているのだ。
これがもっと熟練した魔導士ならば、経験とより高度な理論を用いることで、一連の作業を簡略化し、時間の短縮を図ることが出来る。そして、時には一瞬で力を行使するのだ。
やがてイーリーの左手が炎に包まれた。どうやら、火の住人を呼び出したようである。
素態に入った元素界の住人は、その能力に応じてこちらの世界で最も適した姿になるのだ。そして、
「闇を切り裂け、炎よ！」
イーリーはそう叫んで、炎に包まれた左手を突き出した。炎は渦巻き、闇の中を跳ね回って彼の頭の上に着地した。その姿は、とても可愛らしい、
「にゃあ！」
猫だった。

試験を終えたイーリーは、紺のブレザーにズボンという養成所の制服に着替え更衣室を出た。すると、
「やあ、試験はどうだったかな？」
満面の笑みで近付いて来たのは、入学してからずっと学年トップの成績を維持し続けている、レンツ・ファラディであった。

イーリーは彼を睨み付け、何も言わずに歩き出す。
試験の様子は黒水晶によって映し出され、誰でも見ることが出来るのだ。案の定、レンツはこんなことを言い出した。
「僕が小さい頃、お父様が『砂漠の貴婦人』と呼ばれるスフィルティアを、誕生日に贈ってくれたことがあるんだ。僕に懐いていたんだけれど、魔導士になるため王都へやって来てから、ほとんど会うことが出来ないんだ。代わりと言うと言葉は悪いが、ぜひ君にお願いしたいと思っているんだよ。君の不思議な能力で、僕の寂しい心を癒してくれないだろうか？　ああ、ちなみにスフィルティアというのは猫の種類のことでね……」
きっと、試験に合格していなければ、イーリーは彼を殴っていただろう。
試験の合否は、扱う魔力の大きさによって決まるのだ。もしあの時、現れたのがネズミであったら不合格だった。しかし、魔導書を使ってあのレベルでは、合格といっても笑われて仕方がない。
自分でそのことがわかっているだけに、レンツに言い返すことが出来なかった。
入学してからずっと、イーリーは下から数えた方が早いくらいの成績である。そんな彼に常に上位のレンツが突っかかってくるのは、ある理由があった。
魔導士は魔法の他に、調合も行う。強力な魔力を持った者は各国に召し抱えられるが、それ以外の者は魔導士協会に寄せられた依頼を受けたり、魔具という魔法補助の道具や薬――病気の治療に使うものはもちろん、毒や実験の材料――を作って販売するなどして生計を立てるのだった。
イーリーは、母が病に倒れたときに魔導士になることを決意した。その時から彼の目指すものは、国に仕えることではなく、在野で病と闘うことにあったのだ。そのため調合の授業は、彼にとってもっとも重要視すべきことだったのである。
もともと、記憶力は抜群に良い。魔法も筆記テストでは上位にラ

ンクインするが、才能に左右される実技がどうしても苦手であった。結果、総合では平凡な成績になってしまうのである。

レンツはそんなイーリーに、唯一、調合では勝てなかった。調合の筆記も実技も、イーリーは完璧だったのだ。それが、レンツのプライドを傷つけたのである。仮にイーリーが魔法も優秀であったなら、レンツもそれほどこだわることはなかったのかも知れない。

そんな理由から、レンツはイーリーの顔を見れば、何かひとつ皮肉を口にした。もしストレスが魔力に変換できたなら、イーリーはハイデル王国宮廷大魔導師のチャンドラーに匹敵する魔導士になっていたことだろう。

第一章　二話

機嫌よく口を滑らかに語るレンツに後をつけられながら、イーリーは受付に向かっていた。

魔法課程の試験は合格したが、それは単に卒業試験を受ける資格を得たに過ぎない。これを合格しなければ卒業は出来ず、魔導士にもなれないのである。

この養成所には留年はなく、卒業できなければ退学なのだ。もう一度魔導士を目指す場合は、再び一年から勉強をしなければならない。厳しいようだが、わずかな入学金を支払えばその後は一切費用が掛からないばかりか、毎月わずかではあるが小遣いまでもらえるシステムなので、能力がないと判断された生徒を残しておく余裕はなかった。それでも広く門戸を開けているのは、貧富の差が魔導士としての資質に関わりがないためであり、同時に、それだけの需要があるということでもあった。

受付に到着したイーリーは、数人の列に並んで順番を待った。その間も、すぐ後ろでレンツが顔に掛かる金髪を払い除けながら、饒舌（じょうぜつ）になっていた。大半がファラディ家の自慢であり、すでに何度も聞かされた話ばかりである。

レンツがこうしてイーリーに自慢話をするのは、周囲の生徒たちにとっても見慣れた光景だったようで、気にする者はない。仮に気になったとしても、あれこれ口を挟むことはないだろう。誰も、自分がイーリーに立場になることを望んではいない。

やがてイーリーに順番が回り、窓口に受験票を差し出した。卒業試験の課題は、例年通りレポートの提出とEランクの仕事をこなすことだった。

Eランクは、魔導士協会の依頼の中でもっとも簡単とされ、報酬もごくわずかなものである。

「えっと、じゃあこの封筒からひとつ選んでください。中に依頼内

容が書かれています。同封の依頼完了証明書にサインをもらって、レポートと一緒に提出していただきます。期間は本日より一ヶ月間です。ちょうど、シュタルク王の即位十周年記念式典の翌日までとなるので、忘れないようにお願いします。何か質問は？」
「いいえ、ありません」
「じゃあ、がんばってください」
封筒を受け取ってその場を去ろうとした時、イーリーは受付の人に呼び止められた。
「君はイーリー君だよね？」
「はい、そうですが」
「言い忘れましたが、君はこの試験で不合格だった場合、退学となります」
「はい」
「それで、その後の再入学も許可されませんので、そのつもりでいてください」
「えっ？　それってどういう……」
「つまりだね、君は二度と魔導士にはなれないということだよ」
嬉しそうに、横からレンツが口を挟んだ。
「君のあの成績では、仕方がないところだろうね。唯一、人並みな調合の知識を生かして、医者にでもなったらどうだい？　ああ、でも医者になるにはお金がかかる。君には無理か」
なおも喋り続けるレンツの横で、受付の人が言った。
「魔導士に求められるのは総合的な能力です。特に求められるのは、やはり魔法の力なわけです。魔法の力は努力だけではどうすることも出来ないことを、十分に理解されていると思います」
うなだれるしかなかった。つまり、これ以上は見込みがないということなのだ。
イーリーはくちびるを噛んだ。悔しかったが、まだダメだと決まったわけではない。今回の試験に合格すれば良いのだ。
受付ホールの端に移動した彼は、恐る恐る封筒を開けた。レポー

トなら自信がある。簡単な依頼であるようにと願い、内容を確認した。
「ドラゴン狩りの手伝い……」
イーリーは言葉を失った。
世界で最も巨大で凶暴と言われるドラゴンに挑み、どれほどの戦士が命を落としたことだろう。たとえ手伝いとはいえ、とてもEランクの仕事とは思えない。
……ボクをどうしても退学にさせたいのだろうか？
一瞬、イーリーはそう思ったがすぐに打ち消した。封筒は自分で選んだのだ。きっと何かの手違いがあったのかも知れない。
彼は封筒を持って、受付に戻ろうとした。するとそこへ、レンツが寄って来たのである。
「崖っぷちの君は、どんな依頼を受けたのかな？　ちなみに僕は、空き家に住み着いた怪しい一団の調査、というつまらない仕事だったけれどね」
「ボクのは手違いみたいだ」
「ん？」
レンツは首を傾げ、イーリーの封筒を奪うと依頼書を読んだ。
「何するんだ！」
「……ドラゴン？」
「そうだよ。これはEランクの仕事じゃない。だから交換してもらうんだ。さあ、返してくれ」
レンツはしばらく考え、奪い取った封筒をイーリーに返した。
「これは、君にとって千載一遇のチャンスと言えるだろうね」
「えっ？」
「いいかい、魔導士になれたとしても、君の腕では雇う国はないだろう。だとすれば、個人で依頼をこなすか、どこかに就職するしかあるまい。だが、いずれにせよ、今の成績ではどれも難しいと言わざるを得ない」
「……」

「だからといって、新しく自分の店を開く資金もないだろう。つまり、せっかく魔導士になれたとしても、その能力を生かすことは出来ないということさ」
「そんなことわからないだろ」
「いいや、わかるさ。毎年、数百人もの卒業生がいるんだ。いくら需要があるとはいえ、誰でもいいというわけじゃない。事実、過去の卒業生の中で魔導士以外の仕事を見つけた者は半数近い。つまり、優秀な人材だけが、その後の成功を約束されているというわけだよ。今の君は、絶望的だろうな」
イーリーは、顔をしかめた。彼にも心当たりがあったのだ。
魔導士になるべく村を出て行った若者が、卒業して実家に戻り、農業を継いだことがあった。せっかく魔導士になれたのにと幼い彼は思ったが、今考えればレンツの言う通りなのかも知れなかった。
「しかし、だからこそこの依頼は、チャンスなんだ」
「どういうことだよ？」
「学校の成績よりも、実績を重視する人間もいるということさ。手伝いとはいえ、ドラゴン退治に参加することは、君のお粗末な成績を打ち消すだけの甘い響きがある」
レンツはニッと笑って、イーリーの耳元で囁いた。
「手伝いと言っても、後方支援かもしれない。それに、実際に行ってみてあまりに危険な依頼なら、断ったとしても問題にはならないさ」
その言葉に、イーリーの心は揺れた。
薬を作って病人を救うとしても、やはりどこかに就職しなければならないだろう。路頭で配った薬を飲む奇特な者はいまい。
三年間努力をしたのは、肩書きが欲しいからではなかった。
イーリーは封筒を胸に抱え、小さくうなずいた。とりあえず行って、依頼主から話しだけでも聞いてみよう、彼はそう考えた。
「お互い、かんばろうじゃないか」
レンツはそう言い、イーリーの肩を軽く叩くと、颯爽と去って行

った。そのうしろ姿を、複雑な気持ちで見送ったイーリーは、風に消えるほど小さな声で呟いた。

「感謝、すべきなのかな……」

けれど、それでレンツに対する気持ちが軟化したわけではない。素直に喜べない、それが感想だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9599x/

夢の彼方の魔法陣

2011年10月28日02時07分発行